

これらの3つの時期と、2つの分類法の対応ならびに、各時期でのCA機器・意思伝達装置の利用支援内容例を対応づけると、以下ようになります。

### 「CA機器の利用支援の時期分け」と「必要な支援内容の例」

【準備期】 まだ障害も軽く、コミュニケーション活動に制限のない時期（重症度1～2）。

⇒ 今後、どのようにコミュニケーションを維持していくか考えることが大切です。

○「予備群」から「利用群」へのスムーズな移行を目指す。

利用群になってから支援が必要になるのではなく、予備群から利用群へのスムーズな移行を促すことも重要な支援の1つです。またコミュニケーションが可能な間に、PC等の操作の習得や操作性の改善を行い、CA機器としての利用に結び付けることを想定した支援を行うことも視野に入れる必要があります。

また、意思伝達装置の操作訓練を促すのではなく、PCそのものを楽しみとして利用できるようなインターネットやメール利用等がPCを活用するモチベーションになりうるでしょう。キーボードのないスマートフォンやタブレットPCで、写真を撮っていくことも有効かもしれません。その他、将来にわたり利用するモチベーションになる利用方法を、患者個人の性格や生活環境を鑑みて検討していくこと、見つけ出すことも大切です。

【利用期】 PC等の何らかのIT機器やコミュニケーション機器を用いることで、コミュニケーション活動を維持している時期（重症度2ないし3～5、Stage I～Ⅲ）。

⇒ これらの機器をできるだけ長い期間、利用できるような支援が大切です。

○「利用群」であり続けるための支援を多職種連携で実施する。

利用及びその継続のための支援は、利用群であり続ける期間を可能な限り長期化させることが目標の1つといえます。そのため、適切に身体機能評価を継続して行い、導入時期の見極めや再評価を行う作業療法士等のリハビリテーション専門職（療法士）の継続的関与が必要です。必ずしも同じ支援者でない場合は、適切な情報共有と引継ぎが大切です。

また、コミュニケーションの確保のみならず、生活の中での目的と意欲（ニーズ）を確立しておくことや、看護師や介護職員を含めて継続的にかかわる支援者が、日々の暮らしの中での不具合や利用頻度の低下に気づくことも、大切になります。

【困難期】 随意的な機器操作が困難になり、呼びかけに対しての表情などの変化での意思確認ができるか、コミュニケーション活動が困難な時期（重症度5、Stage IV～V）。

⇒ この段階に対応する、BMIなどの新たな機器開発も行われていますが、機器にこだわらずに、表情のわずかな変化など他のコミュニケーション手段を考えることも大切です。

○「中止群」への移行を可能な限り遅らせる。

支援が十分に得られていないために中止群（利用困難者）に移行している場合もあると考えられます。そのため、本当にコミュニケーションが不可能なのかを適切に見極めることが必要です。例えば、ある装置での中止群は、新たな装置の予備群といえます。ここでは、特定の入力スイッチや装置の利用にこだわるのではなく、次の装置での予備群・利用群とすべく、新たな装置の活用も意識し、適切な身体機能評価を含めた再度のアセスメントが求められます。